

## 『青森県史 通史編2 近世』

兼平 賢治

約二〇年という長きにわたる青森県史編さん事業の集大成として、二〇一八年三月に待望の通史編三巻が刊行され、全三六巻からなる『青森県史』が完結した。なかでも通史編は、これまでの編さん事業の成果に基づいた青森県域の新たな歴史像が示されることとなり、それが基盤となつて今後の研究の発展につながっていくことから、その刊行を待ちわびていた。まずは刊行を喜び、編さん事業に携わられてきた方々の労をねぎらいたい。

さて評者は、近世史を専門とし、盛岡藩政をおもな対象に研究を進めてきた。大学院生のときに『青森県史 資料編 近世1 近世の北奥の成立と北方世界』（平成一二年度）が刊行されて入手し、爾来、資料編を縦横に活用しながら、研究者としての道を歩んできた。資料編や通史編の執筆にあたられた方々とも交流を深めてきた。そこで、力不足であることを承知しつつも『青森県史 通史編2 近世』の書評をお引き受けし、編さん事業の意義と成果について確認したい。

近年刊行される自治体史の多くに共通していることだが、『青森県史』の通史編も手に取りやすく、扱いやすいサイズと厚さになっている。広く一般にも親しまれ愛読されるように、本文中にはふりがなや用語の解説が多く施され、また、図版などもふんだんに挿入されるなど、随所に配慮がみられる。内容は、最新の研究成果に目配りして、学問的に高い

水準を保ちながら、理解しやすいものとなっている。執筆を担当された方に若手研究者も多くみられ、この点でも意欲的である。

それでは、『青森県史 通史編2 近世』の章構成を紹介しよう。

第一章 近世の成立と北奥地域

第二章 幕藩体制の確立と領国支配

第三章 近世北奥社会とアイヌ

第四章 宗教と精神世界

第五章 北奥の資源環境と諸産業

第六章 交通と流通の発達

第七章 転換期の藩政と北奥

第八章 深刻化する「内憂」と「外患」

第九章 生活のなかの学術・文化

第十章 北の幕末・維新

各章については後述するが、通読して感じたことは、長谷川成一氏による「刊行にあたって」や、浪川健治氏による「刊行のねらい」でも示されているように、従来の県史にみられた藩別の通史に基づく記述を採用せず、青森県域に領地をもつ弘前藩・黒石藩・八戸藩・盛岡藩・七戸藩を、北奥という地域の歴史のなかに落とし込んで描く試みがなされており、一体的・横断的にその歴史の移り変わりが理解できるようになっていることである。この点が本書の魅力であり、大きな特徴であろう。

そしてまた、北奥という地域の枠にとどまらず、津軽海峡を挟んで密接にかかわりあいながら歴史をともにしてきた夷島（和人地〈松前藩〉・蝦夷地）、日本海海運によって関係を深めてきた日本海沿岸地域と京

都・大坂、太平洋海運による江戸とのつながりも強く意識されている。さらには、北奥の富である俵物や銅との関係で長崎、その長崎を介して清国や、一八世紀後半以降になって接近してくるロシアをはじめとした諸外国も含めて、北奥地域の歴史が展開していくあり様を躍動的に描いており、本書の試みは成功していると評価できる。

このほか、特色ある章や内容も魅力である。夷島と津軽・下北半島に住むアイヌや、北奥の被差別民を取り上げた第三章、地球規模の問題として人びとの関心が高まっている環境や資源について取り上げた第五章、近年列島各地で頻発し、歴史学も大きく関心を寄せて研究を深めつつある自然災害を、北奥の気候条件による影響以上に人災の側面をもった飢饉とともに扱った第八章があげられる。さらに、第八章と第十章では、北奥地域の各藩と人びとが従来の枠を大きく超えて活動を展開する姿を、松前持を中心に、蝦夷地警備、幕末の動向から描き出している。多様な視点から北奥を捉えており、通史として最良の書を得たといえよう。

このように、閉鎖的で内向的な社会といった北奥地域に対するかつての歴史像を過去のものとし、藩境を超えて広くネットワークを形成し、経験から「知」を蓄積して時代の変化に対応する北奥の人びとの営みを歴史のなかに描き出すことができたのは、県史とともに進められてきた市町村の自治体史編さんの成果や、蓄積が進んだ近年の研究成果に基づくものでもあり、最新の成果を踏まえた歴史像の提示といえよう。それでは以下に、各章の内容を紹介したい。

第一章は、近世大名領の成立、奥羽仕置と北奥の領主、統一政権下の北奥地域からなる。大浦（津軽）・南部・安東（秋田）の各氏と、夷島

の蠣崎（松前）氏が、全国統一政権である豊臣政権に組み込まれる過程と、それに抵抗し滅ぼされる人びとを描く。豊臣政権の諸政策が徹底されたほか、伏見作事杉板の上納や鷹献上を求められた北奥の諸大名は、その対応に苦慮しながらも懸命に履行し、政権中枢に接近することによって自身の領内での支配を強化していったとする。

第二章は、藩政の成立、家臣団の編成と支配機構の整備、農政の確立、地方知行制と給地支配からなる。一七世紀前半に大名領域の画定が目指され、人返し交渉がみられたが、それを北奥における幕藩体制の確立に向けた動きと評価する。また、各藩の藩政の成立過程を描くが、城下町形成、家臣団統制、支配機構の整備、農政の確立と、共通した課題を克服しながら藩政を成立させていったことがわかる。また、北奥の諸藩の特徴である地方知行制についてもその実態を取り上げる。

第三章は、身分編成と生活圏、本州のアイヌ、シャクシャインの戦いと北奥社会からなる。実態の解明が遅れていた北奥の被差別民について、彼らのなかには身分上昇を目指す者や、藩権力との接近を図る者がいたこと、藩境を超えたネットワークをもち、生業だけでなく情報収集活動にも従事していた実態を明らかにする。またアイヌについては、藩権力が彼らに対する支配を強めて編成を進め、その過程で彼らの存在に変化が生じていったとする。シャクシャインの戦いについては、北奥のみならず東北の諸藩に軍事的な緊張をもたらし、軍事体制にかかわる内容を含めた情報活動の展開がみられたことを指摘する。一八世紀になりアイヌの同化政策が進められるなかで、「夷風」排除の風俗統制が展開されたことにも言及する。

第四章は、藩の宗教統制、民衆生活と信仰、武家と信仰からなる。各藩による寺社統制について論じるが、一方で宗教者同士が対立する場面もみられたこと、幕末になると社会不安を背景として新たな宗教者があらわれ、新興宗教の広がりは従来の宗教勢力を脅かすまでになったことを指摘する。民衆の信仰は自然との関わりで取り上げられており、武家の信仰では、民衆ばかりでなく彼らも神仏の加護を求めており、日常の行動に信仰が深く影響していたことを紹介する。

第五章は、鉱山資源とその開発、津軽半島と下北半島の林業と水産業、馬産と牧、開発と自然破壊からなる。各藩の鉱山開発を述べ、地域社会の再生産を支える産業であったことを指摘する。下北半島の豊かな山林資源にも触れ、良質な木材は北奥地域に多くの商人を呼び、流通にかかわる商人と山師や百姓とのあいだに交流を生み、広域な地域どうしのつながりを形成したとする。飢饉に際して、北奥の山林は御救山としての機能も果たした。馬産については、諸藩の馬政や牧の展開、民衆の負担、弊牛馬の処理について述べる。開発については、山林の荒廃が様々な災害を引き起こしたこと、また、生息している動物と人間との関係に大きな影響を与えたと指摘する。

第六章は、日本海海運、松前・蝦夷地と海の道、太平洋海運と八戸藩の交易、陸の道と河の道からなる。青森湊を取り上げるが、蝦夷地警備にかかわる需要の増加により、松前や蝦夷地の市場が全国市場となるなかで、青森町は湊としての地位が脅かされ、衰退していったとする。また、海運をとおして全国市場と強く結びついていたこと、本来は厳しく取り締まるべき抜荷であるが、藩の統制が有効に機能しない段階になる

と藩経済維持のため非公式な流通ルートが追認されていた点を指摘する。

第七章は、中期藩政改革と殖産政策、頻発する災害、天明飢饉と地域社会からなる。弘前藩の宝暦改革では、在方商人としての性格をあわせもつ上層農を、藩がどのように取り込み統制するかに関心が向けられていたことを指摘する。またこの改革は廻米依存からの脱却を図り、殖産興業が推進されて全国市場に対応したものであったとする。災害と飢饉については、全国的に災害に見舞われた一八世紀だが、北奥でも災害が頻発していた状況を紹介し、危機的状況下にある民衆が求めたのは、藩からの単なる御救ではなく、米穀を正当な価格で購入・確保できる状態であり、富裕層の商人にはそうしたつとめが求められたと指摘する。

第八章は、蝦夷地政策と地域社会、後期藩政改革の展開、松前持と民衆移動、商人と農民たちの天保飢饉からなる。本章では蝦夷地警備が諸藩や民衆に与えた影響を論じる。特に弘前藩における藩士在宅令の実施や民衆の情報収集活動は興味深い。また、労働力の需要増加に比べて松前・蝦夷地に渡り、滞在を長期化させた松前持の実態を紹介する。天保飢饉は松前持の規模をさらに拡大させるとともに、御救を実施できない藩は、地主経営を行う重立層に救済のつとめを転嫁し、責任までも押しつけようとしていたと指摘する。その結果、一般農民は小作人化し、一層の地主経営の展開がみられるようになったとする。

第九章は、史書と由緒、生活のなかの知と文化、地域から生まれた知性、蘭学から洋学へ、からなる。各藩の史書の編さんと藩政記録を関連づけて述べられている点は、『青森県史』ならではの記述だろう。また、知と文化といえは新しいものを導入することを想像するが、八戸藩領軽

米村では、窮迫した奉公人から労働を奪わないために、敢えて先端的な農具の導入をしなかったという。人びとの交流のなかで北奥の知性が形成されたり、新しい学問に抵抗感を示す人びとに対して技術を磨き疑念を払拭する努力を重ねて洋学を浸透させていく過程は、単なる思想や技術の紹介にとどまらず、まさに北奥の確かな知の営みといえよう。

第十章は、開国と北奥諸藩、蝦夷地の警備と海防、民衆の維新史、近世北奥の終焉と近代への模索からなる。近世後期から幕末にいたって近世社会の根幹である身分秩序が大きく揺らぎ、箱館の開港や来航する外国船舶の増大と交易によって大きく変容していく北奥地域の姿を、これまで各章で論じてきた多様な視点から総括的に描き、近世の終焉と近代の黎明をみる。本書で一貫して取り上げてきた松前・蝦夷地との関係でいえば、箱館の開港により北奥諸藩に様々な身分の人びとの通行を呼び、民衆の負担にもなったが、最新の知識や情報もたらされたと指摘する。また、大量の労働力の移動は、松前・蝦夷地にだけ向かうのではなく、その不足を補うべく秋田藩領から弘前藩領への労働力の移動を生んだ。そして最後に、近年の研究成果を基に七戸藩を描き、政治史ではなく近代移行期における地域社会の「知」で締めくくった点も、本書らしい構成の工夫といえよう。

以上のように通読して、評者の関心のままに気付いたことを述べたい。まず、誤字や事実の誤りはほとんどみられないが、評者の研究対象である盛岡藩の「雑書」についていえば、七八頁では一八九冊、五三四頁では一七三冊と紹介するが、正しくは一九〇冊である。北奥諸藩の公務日記を取り上げて論じた点は興味深いが、もう一步踏み込んで、藩政史料

や地方文書の残存状況について、県史の史料調査の成果を基にその違いを比較すると、さらに新しいことがいえそうだが、いかがであろうか。次に、藩政の成立と農政の確立を取り上げる際、北奥にも大きな影響を与えた元和飢饉と寛永飢饉について、紙幅を割いて言及してもよかったのではないかと感じた。関連して、盛岡藩では一七世紀中頃まで目安を活用して領民の目でもって代官や給人の不正を監視したが、機構が整備される一七世紀後半以降、直訴に対して次第に厳罰で臨むようになる。近世と藩政の成立期について、史料の制約を理解しつつも、もう少し領民の姿の描写があってもよかったのではないかとの印象をもった。

最後に、評者はかつて南部重直の家臣団形成について、新参家臣の召抱えの実態を分析し、彼らは従来いわれてきた蔵米取ではなく、一〇〇石以上、四〇〇石未満の地方知行が多いこと、しかも南部氏の本貫の地である領北部にも知行地が与えられていた事実を指摘した（拙稿「近世前期における牢人（新参家臣）の一生と武家社会の転換（上）」『岩手史学研究』九〇、二〇〇九年／「近世前期の牢人召抱えと大名家中」『歴史評論』八〇三、二〇一七年）。この成果も含めてもらえたならば、盛岡藩の家臣団の成立と統制は、もう少し違った描き方もあったように感じた。

いずれにしても、新たな歴史像を提示した待望の通史編を得て、この成果を基盤にした北奥地域に関する研究のより一層の進展が期待される。（菊判、七六二頁、青森県、平成三十年（二〇一八）三月十五日刊行、本体価格三二〇〇円＋税）

（かねひら・けんじ 東海大学文学部専任講師）